

隣人を愛せよ!

K a o r i & H i r o k i

古野一花

Icchika Furuya

termity



エタニティ文庫

目次

隣人を愛せよ！

5

奇跡の続き

237

書き下ろし番外編 旦那サマは心配性

339

隣人を愛せよ！

優しい、真面目、いい人……

それは、私が時々言われる表向きの言葉。でも、知ってる。

平凡、地味、お人好し……そんな言葉と同じ意味だってこと——

六月下旬の関東地方。梅雨つゆのまつ最中だというのに、今日はいい天気だった。日中の最高気温は三十度を超え、すっかり日が暮れた今もかなり蒸し暑い。今年も暑い夏になりそうな予感がして、うんざりする。

私、小川香おがなかあり。

今日も一日、顔に笑みをはりつけて、お仕事頑張りました。ふう。

地元の信用金庫に就職して、あつという間に四年。仕事に対して、どうにか小さな自

信が生まれ始めたこの春、新人の遠藤えんどうさんの教育係をおおせつかつて——それから悪戦苦闘の日々が続いている。

今日も伝票の間違いを見つつけちゃつて……私としては、やんわりと指摘したつもりだったんだけど、彼女はすっかりむくれ顔。

日付けを一日勘違いした——確かにそれは、遠藤さんの言うとおり、此細きこなミスなのかもしれない。でも、金融機関ではその手の間違いは許されない。ほんの小さなミスが、お客様の大きな損失に繋がることもあるから。

おだてたり、なだめたり、彼女にかける言葉をあれこれ工夫してみたけれど、感情がそのまま顔に出る遠藤さんの教育係は、難しく、へこむことが多い。

おしゃれのセンスのなさを自覚している私とは違い、遠藤さんはファッションモデルで可愛らしい。つまり私とは全然違うタイプってこと。だから共通の話題もとほしくて、教育係になって三か月近くが経った今も、私は彼女となかなか打ちとけることができずにいた。

そのうえ、ここ数か月の私のプライベートは——人生やめたい——って、一瞬といえ思っっちゃったぐらい悲惨な日々。

でも、彼女のおかげでそのつらさから目をそらすことができたのかもって、最近はい方に考えている。だって勤務中は、自分の仕事と遠藤さんのことで精一杯。余計なこ

とを考えなくて済むのは、確かなんだもの。

夕食後、暑さと気苦労によってかいた汗をお風呂で洗い流して、やっとさっぱりした。洗いたての長い髪を一つにまとめ、スッピンにメガネでリラックスイアに身を包むと、心底ほっとする。冷たい麦茶でも飲むと、キッチンに足を向けたところで思い出す。

今日は金曜日だった！ 麦茶じゃなくてビールにしようっと。

二十七歳独身女の金曜の夜の楽しみがこれだなんて、ちょっとささやかすぎるかも。苦笑いを浮かべてリビングに入った途端に、母に声をかけられた。

「香、久美子さんにトウモロコシ届けてきて」

そういえば、暑さでモワツとした空気の中にトウモロコシのおいがまじっている。

「今年の初物よ。久美子さん、トウモロコシ好きだからおすそ分け。ゆでたてよ」
了解。ささやかな楽しみは、ちょっと後回しだ。

高橋たかはし久美子さんは我が家の西隣に住んでいるパワフルな女性。大きな体にカラフルな洋服をまとい、颯爽さつそうとお出かけする姿は若々しく、もうすぐ還暦を迎えるようには見えない。いつも元気で行動的。そんな久美子さんと一緒にいると、そのパワーを分けてもらえるような気がして、私は彼女のが大好きだ。

トウモロコシをのせたザルを持ち、キッチンのドアから外に出る。家の中よりはましだけど、まだまだ暑いなあ。

わが家の庭には、フェンス代わりに生垣いけがきが植えられている。でも、お隣のキッチンのドアにつながる部分だけ、その生垣がポツカリと空いている。わが家のキッチンのドアを出て、庭を三十歩も歩けばそのまま高橋家のキッチンドア。そんなところからもわかるように、両家は昔から本当に仲が良い。

ちなみに、久美子さんは一人暮らし。留守がちだから心配だったけど、今日はキッチンの窓が明るい。よかった、久美子さんいるみたい。窓の明かりを眺め、私は小さく微笑んだ。

トントンとドアをノックする。

「久美子さん、こんばんは」

「はーい！」

元気な久美子さんの声。続いてドアが開くと、目の前には……

「ヒロツ！」

「よおっ」

久美子さんの息子、広輝ひろきが立っていた！

その顔を見ただけで——心が弱っている今の私はほっとして……目が潤んできてし

まう。

ダメダメ！ どん底から自力でここまで立ち直ったじゃないの！ 二十七歳はもう大人！ いいかげんに強くならなくちゃ！

私は、ちよつとうつむいて軽く目をつぶった後、無理やり笑みを作って、顔を上げた。「——いつ……帰ってきたの？」

「五分前。おゝ、モロコシ！」

広輝は笑って私の手からザルを取り上げ、

「ほら。上がれよ」

と言つて、立てた親指をクイツと家の中に向けた。

ヒロこと、高橋広輝は、今は実家を離れて暮らしているが、久美子さんの息子で、たつた一人の家族だ。広輝の父親は、彼が二歳の頃事故で亡くなっている。

広輝の父親が亡くなった後、久美子さんは再婚することなく、働きながら広輝を育てた。専業主婦だった私の母は、折に触れて久美子さんを手助けし、我が家で広輝をあずかることもしょつちゅうだった。

今と比べて子育てに対する支援が少なかった時代に、それは本当にありがたいことだったと、いつだったか久美子さんが言っていた。

私は、広輝が自分の家にいるのが嬉しかったから、それが久美子さんにとってありがたいことでよかった——と、それを聞いて思った。

つまり、私と広輝の関係は、いわゆる『ただの』おきななしみ幼馴染。

同い年の私たちは、小学校に入学してから高校を卒業するまでの十二年間、同じ学校に通つた。

広輝が華やかなサッカー部で女子にキャーキャー騒がれていた時、私は家庭科部で地味に過ごしていた。

どうしてそんな絶滅危惧種ぜつめつぐいしゆみたいな部活に入ったのかって？

まず、運動が苦手つてのが根本にある。それに他の文化部にしたつて、美術部に入るには絵がヘタすぎだし、吹奏楽部は練習が大変だつて噂だつたし、情報処理部や囲碁いご将棋部なんて……真面目なメガネ男子ばかり。かといって運動部のマネージャーなんてキャラじゃないし、ましてや広輝のいるサッカー部のマネージャーなんて……怖くてできなかった。

選択の余地なしで入った家庭科部は、和気あいあいとして楽しくかつた。今でも付き合いのある友人もできたし、地味だけどい時代だつたなあ……なんて思い出しては満足している。

部活のおかげで料理が好きになった私は、大学も食物栄養学科に進んだ。

そして、大学卒業後は、地元の信用金庫に就職し、今でもそこで働いている。
 ——髪は今どき染めもせず、ストレートのロングを一つに縛り……さっぱりと。
 ——パソコンで目が疲れるので、コンタクトレンズはやめてメガネをかけ……信金職員らしく。

——化粧はしないと怒られるので、口紅と茶色のアイシャドウを、さつと塗って……一分で完了。

そんなふうには高校、大学、社会人……とここまで人生を歩んできた。知り合いに久しぶりに会うと必ず言われるのは「変わらないね」の一言だ。

肩をたたかれて笑いながらそう言われると、複雑な気持ちになる。だって、それってほめ言葉じゃないよね？ だいたい、そう言った本人は、必ずキラキラしてるんだもん。それに対して私は、「○○はキレイになったね〜」なんて言っておける。そうすると、キラキラ倍増の笑顔で、「やっだ〜」なんて言っておける。全身をクネクネとさせる。特に男連れの時。私にはお世辞のひとつさえ返ってこない。

「変わらないね」という言葉は二十年も経ったらほめ言葉になるのかもしれないけど……でも、今度は笑って「老けたね〜」って肩をたたかれるんだよ、きつと。

ああ、二十七歳の私……なんて後ろ向き。最近たて続けに起きた諸々のせいで、ただでさえ少なかった自信をすっかり喪失して、平凡とか地味とか……そんな自己評価に、

ネガティブっていうのが加わってしまった。

「お、うまそーだなあ」

さつそくトウモロコシに手を伸ばす広輝。

「嬉しいわあ！ ありがとうね」

そう言っ、壁の時計を見て目を見開く久美子さん。あら、やっぱり今夜もお出かけ？
 「——ああっ、もうこんな時間！ 私は後でいただくね。——ヒロ、全部食べないでよ！
 私はお出かけるけど、香ちゃん、ヒロの相手してやって」

そう言い残して、久美子さんはあつという間に出て行ってしまった。

「久美子さん、今日は何？」

「んんっ……カラオケ……だつてさ」

広輝はトウモロコシを食べながら、モゴモゴと答える。

「せっかくヒロが帰ってきたのに——久美子さんったら……」

つい非難めいたことを口にしてしまった。

とにかく元気な久美子さんは付き合いが多くて忙しい。今は仕事はしていないけど、やれボランティアだ、旅行だ、カラオケだ……と、色々なサークルに入って楽しそうにしている。

「ああ、いいんだよ。俺が急に来たんだし、元気だってことはわかったから。それに、いつもは俺も離れて暮らしてらるだろ。だから、こっちで付き合いがいっぱいあったり、こうやっておまえが来てくれるのを見ると、安心するよ。本当にありがとな」

確かに、私はよくこの家に来るんだけど、それは久美子さんのことが好きだから。私が久美子さんに会いたくて来てるんだから、広輝がお礼を言う必要なんて全くない。でも、そんなふうに言われて、フワツと胸のあたりが温かくなった。

こういう気分は久しぶり。さすが広輝。私を救うことにかけては昔から天才的だったなあ。

嬉しくなった私は、黙ったまま微笑んで広輝を見ていた。広輝はトウモロコシを食べながら笑って言った。

「母さんも、金の心配がなくなったから、今までの分、残りの人生、楽しんでるんだろ」

そう——私の向かいに座ってトウモロコシを食べているこの男は、実はかなりの有名な人でお金持ちになっていたのだ。

私には二つ年上の兄、徹とほらがいる。私の父は学生時代サッカーをやっていて、息子にもサッカーを教え込んでいた。我が家に入り浸っていた広輝も自然と一緒にボールを蹴るようになり、やがて二人はサッカーが大好きな少年になっていた。

いつも父と三人で何やらサッカーの話をし、テレビ中継を見ながらギャーとかウオーとか盛り上がっていたっけ。特にゴールが決まった瞬間のあのオタケビって、騒音だよ……。地元のJ1チームの応援にもよく出かけていた。

小学三年生の時、広輝はスポーツ少年団のサッカー部に入った。当時は先に入団していた兄と同じようなレベルだったけど、あつという間に上達し、中学時代には、すでに将来を有望視されるゴールキーパーとして県選抜選手になっていた。

高校は、県で一番サッカーのレベルが高い私立高校から入学のお誘いがあったけど、自宅から近いほうがいいと言って、近所の公立高校に進学した。私の母校でもあるこの高校は、生徒の半分以上が大学に進学し、そのうち三分の一が国公立大学に合格するところこの進学校。広輝は、そんな進学校でもずっと上位の成績をキープしていた。

それでいて彼のサッカーのレベルは、県内トップクラスだった。大会では、入学を断った私立高校に惜しくも負けちゃったけどね。広輝は、部活に加えて県選抜チームでも鍛えられ、卒業後、そのままJリーガーになった。二年間Jリーグで活躍したのち、ドイツのプロチームに移籍。そこで五年ほど活躍して引退した。

日本を代表するサッカー選手になり、守護神なんて呼ばれていた広輝の引退を惜しむ声は多かった。だけど引退会見では「自分のサッカーはやりきった。次に向かって進みます」と、フラッシュを浴びながら、広輝はさわやかに笑った。

そして、日本に戻った彼は——青年実業家になっっちゃったのだ。

毎日、朝から晩までサッカーに明け暮れていたくせに、高校時代、広輝はしつかりと英語とドイツ語をマスターしていた。さらにドイツでは、サッカーをしながら経営学でも学んだんじゃないだろうか。そう思わせるぐらい広輝の実業家としての活躍ぶりには目を見張るものがある。

日本に戻った広輝は、東京の郊外でスポーツクラブの経営を始めた。

ヒロスポートクラブと名付けられたそこは、広いプールや最新のマシンが並ぶジムエリアの他に、インドアのテニスやサッカーのコートもある。子供向けのスポーツスクーラムも開いていて、広輝のネームバリューから、特にサッカースクールは大人気のように。今では都心にも進出し、そちらも順調のようだけど、まだまだ手を広げるつもりでいるみたい。けっこうな野心家。

「高橋広輝 ドイツで磨いたその手腕！ ヒロスポートクラブ 成功の秘訣!!」なんて記事が週刊誌に載るくらい、仕事における広輝の辣腕らつわんぶりはすごいらしい。

広輝は見事にやり手経営者の仲間入りを果たしていた。

それ以外にも、テレビや雑誌でサッカーの解説をしたりと、いろんなメディアに登場するから忙しいだろうに、広輝は時間を作っては、頻繁に実家に帰ってくる。きつと一

人暮らしの久美子さんが心配なんだよね。けっこう親孝行なの。

でも今回は久しぶり。二か月ぶりぐらいだろうか。帰って来るたびに、海外のお土産みやげや東京のおいしいものが我が家にも届く。

ほんと、広輝って、良くできた男だよ。昔からずつとそうだ。

幼い頃の私にとって、広輝が家にいることは当たり前前で、兄が二人いるみたいな感じだった。

同じ年、しかも私のほうがひと月ほど誕生日が早いのに、まるで兄のような広輝。

幼い頃から広輝は賢くて冷静な男の子で、妹体質の私には頼れる存在だった。他の男の子のように理由もないのに意地悪することもなく、私が困っている時はいつも助けてくれた。宿題を写させてくれる、なんて些細さいさいなことから、私に意地悪したり、キツイ態度をとる女の子をなだめることまで。

まあ、キツくあたられる原因の多くは、というか、ほとんどが広輝にあるんだから、責任を取ったってうだけかもしれないけど……

広輝は、頭の良さが顔立ちに表れている。それは誰もが頷くんじやないかな。ちよつとキツめの目元にスツと鼻筋が通っていて、キーパーとしてゴールを守る時の眼光は鋭

く、迫力に満ちている。それに、久美子さん譲りで体も大きい。しかも背が高いだけじゃなくて、その胸板なんて……見ただけで頼りがいがあるって思っちゃうぐらい厚い。簡単にいえば、サッカーがうんと上手な、頭の良い、涼しげな顔立ちのたくましいイケメン。

そんな男の子は、もちろん女の子からモテる。で、そういう男の子と、たとえば家が隣同士だからって親しくしていると、なんだかやっかまれちゃうんだよね……

私にキックあたる女の子に、広輝はさりげなく、「家が隣同士だから、香は妹みたいなもん」なんて言って安心させる。その上で、その子に「髪がきれい」だとか、「肌がいい」だとか、「色が白い」だとか、「肌が小麦色で健康的」だとか言っただけでほめる。

私にはそんなこと言ってくれたことないのに……このタラシめ、なんて思ったこともあるほど。

広輝と親しい私をやっかんでいた子は、このホメ言葉でますます広輝を好きになって———ありがたいことに、私に優しくなる子もいた。

高校時代までの広輝は、全ての告白を「今はサッカーに打ち込みたいから」なんてセリフで断っていた。たとえそれが、学年一の美少女でも———

広輝って、ものすごい女たらしなのか、それとも女嫌いなのか、その当時はわからなかったんだよね。でも本当のところは、サッカーと語学の勉強で忙しすぎて、カノジヨ

ができて、一緒にいる暇がないって思ってたんだって。後日それを聞いた時、当時広輝を、女たらし———なんて密かに思っていたことを、心の中で謝った。

いつの頃からか、そんな広輝を、私も好きになっていった。だって、かっこよくて、いつも助けてくれる男の子を好きになるのって、女の子だったら当たり前だよね。実際、実の兄よりも、ううん、それどころか父よりも頼りになるんだもの。

でもね、広輝の言葉どおり、自分のポジションが「妹みたいなもん」なことは、よくわかっていたから、親しい友人も含め、そんな自分の気持ちも誰にも言えなかった。もちろん、広輝本人になんて言えっこない。

私とは比較するのもオコガマシイような美少女が、広輝に告白して玉砕した———なんてウワサを聞けば、妹ポジションにいられるだけでも幸せって思っちゃうよね。変なことを口走って、そのポジションすらなくしてしまうのは怖かったし、それ以前に、変なことを口走れるほどの勇気も自信もなかったし。だから、広輝への思いは胸の奥にしまいこんできた。

幸い、こんな私でもいいって言ってくれる男の人もいたから、それなりに恋愛経験はある。

だけど、広輝はやっぱり特別。彼の一番になるなんて大それたことは考えていないけど、ずっと変わらずにそばにいたい。

「ヒロ、いつまでいるの？」

広輝はあつという間にトウモロコシを一本食べ終えてしまった。

「とりあえず、この土日は休みとったから、いるつもり。まあ、適当に帰るよ」

「そっか。なら、ゆつくりできるね。——あつ、ねえ、この前のフランス大会、現地で解説してたよね？」

ふと、先日テレビで観たサッカーの試合を思い出す。生中継で放送は深夜だったけど、広輝の解説だもの、もちろんライブを見て、おかげで翌日は寝不足で仕事がつらかった。「いいなあ……私ね、すっごくフランスに行つてみたいの。ねえ、観光とかできた？ ルーブル美術館とか行つたの？ 写真、撮ってない？」

たたみかけるように聞く私に、広輝は苦笑いした。「ギリギリのスケジュールだったから、どこも観光なんてできなかったよ」

そう言った後で、ん？ って、何か思い出したような顔をしてつぶやいた。

「だけど……待てよ、部屋に、前に行つた時の写真があったなあ。見るか？」

「うん！」

広輝は立ち上がって冷蔵庫から缶ビールを二本取り出すと、テーブルの下に置いてあつたポストンバッグを手にとつた。そのまま廊下に出て階段を上がる。私はウキウキ

と後に続いた。

二階の広輝の部屋は、窓が閉まっていて蒸し暑かった。

「あつついな」とつぶやいて、広輝はエアコンのスイッチを入れ、私にビールを手渡す。そして自分のビールはローテーブルの上に置いて、写真を探し始めた。

私はベッドを背もたれにして床に座り込んだ。目の前のローテーブルにビールをのせてブルタブを開け、ビールを喉に流し込む。あゝ、よく冷えていて、おいしい！

そういうえばこの部屋に入るのは久しぶり。高校生の頃までは、時々このテーブルで苦手の数学を教えてもらったなあ。懐かしいな。すっきりとかたづいた部屋の様子は、その頃のまま。ビールを飲みながら壁に貼られた海外のサッカー選手のポスターを眺めていると、広輝がテーブルの上にアルバムを置いて私の隣に座り込んだ。

「ドイツにいた頃、フランスに遊びに行つたことがあつたんだ。有名な観光地には行つたと思うけどな」

私はさつそく、そのアルバムの表紙を開いた。

「ヒロ、ちょっと若いね。——わあ、この人、王子様みたいなイケメン！ これ、だれ？」

私は、広輝と一緒にこちらへ笑顔を向けている外国人を指さした。

「ドイツのチームメートだ。こいつ、スタメンじゃなかったけど、日本がすっげー好きな日本オタクで、仲良かったんだ」

「つてことは、サッカーも上手いってことだよな。金髪、碧眼、運動神経もよし！ いるんだねえ、こういうマンガに出てくるみたいだな」

ちよつと鼻息が荒くなつちやつたかな？ 広輝はあきれたような声を出した。

「こいつ、中身もマンガだぜ。こういうのがタイプか？ 今でも、連絡取つてるぞ、俺」

「私に限らず、ほとんどの日本の女の子は、こういう男の人ステキって言うと思うよ。私は、自分の身の程を知ってるから、こんなイケメンがタイプだなんて、言えませんけど！」

なんとなく恥ずかしくて、私は笑いながら答え、ページをめくつた。

「——あつ、ムーラン・ルージュにも行つたんだ！ いいなあ」

「お前、結構くわしいなあ……」

フランスの有名なキャバレーの名前を挙げた私に、意外そうに広輝が言う。その時、写真の中のイケメンが着ているシャツの柄が目に残まつた。

「これ……このシャツの柄、鳥？」

「ん？ ああ、これか？ これは、アニメのキャラクターだよ。ほら、ゲームなんかにもなつてる『バケットモンスター』に出てくる……え〜つと、何だっけ？」

「ああ、あれね！ そうか……シルエットだと、小鳥みたいで可愛いね」

「——あつ、そうだ！ ちよつと待つてろ——」

いきなりそう声を上げた広輝は、ポストンバッグを引き寄せて中をごそごそと探り始めた。どうしたんだろう？ つて思つて見ていると、やがて中から小さな細い包みを取り出す。

「——ほら、ちよつと遅れたけど、誕生日おめでとう」

そう言つて、広輝はその包みを私に差し出した。

「ええ！ 私の誕生日、覚えてたの？」

私は驚いて、つい大きな声を上げて広輝を見上げた。

「そりゃあな。子どもの頃、いつもおまえの家でケーキ食つてただろ。これな、この前のフランスで見かけて、おまえが好きそうだなあつて思つたんだよ。そろそろ誕生日だし、たまにはいいかなつて、買つて来たんだ」

「ありがとう！ 開けてもいい？」

広輝からの思いがけないプレゼント。私は嬉しさのあまり、はしゃいでしまった。

「もちろん。でもブランド物でもないぞ」

広輝は少し困つたように笑っている。可愛い包みの中から箱を取り出し、ふたを開けると……

「——わあ……ステキ！ さつすがヒロ。本当に私の好みぴつたりだよ！」

シルバーのネックレスだった。トップには、銀色の小枝の上で身を寄せ合うブルーの

小鳥が二羽。

「おまえ、昔っから鳥が好きだろ。なんだっけ……ほら、チルチルミチル？ あの話が好きだったよな。手提げバッグが鳥柄だったり、キーホルダーとかストラップとか、やたらと鳥が多かった」

嬉しさにゆるんだままの私の顔を見ながら、広輝はちょっと得意げな顔をした。

「——それ、泊まったホテルの近所にあった、ちっちゃい店のウインドウに飾ってあったんだ。向こうの作家の手作りだったよ」

ブルーもシルバーも私の好きな色だし、何より鳥のモチーフが、私の好みにぴったり！

「なんか、あまりにも可愛すぎて、もったいなくてつけられないかも……」

「そんなこと言わないで使ってくれ。——あつ、でも龍一には言うなよ」

広輝の口から出たその名前に、ドキリとして胸が苦しくなる。

「自分のカノジョが、他の男からもらったアクセサリーなんてつけてたら、やだろ？」

カノジョ……という言葉に、急に体が冷たくなったような気がした。

「俺、買う時には、香が好きそうだなあって、それしか思わなくてさ。アクセサリーはまずかったなって、後から思ったんだ。でも、俺からのプレゼントだって、言わなきゃいいよな？」

大喜びした私の様子を見たせいか、広輝はくっつくたかない顔で笑っている。私はうつ

むいて、自嘲気味に笑った。

「——ははっ……安心して。そんな心配、もういらなくなっちゃったから」

「なんで？」

広輝は怪訝けげんそうな表情を浮かべて軽く首をかしげている。仕方ない。私はため息を吐いてから重い口を開いた。

「……私、龍一と別れちゃった」

「いつ!? なんでだよ!？」

大声を上げる広輝の顔を見ていられなくて、私はうつむいて小さな声で答えた。

「えっと……二か月ぐらい前に。——龍一、来月の二十日に結婚するんだよ」

「マジかよ!」

「……うん」

私はうつむいたままうなずいた。

「おまえと別れて、まだ二か月なんだろう？ どこ誰と結婚するってんだ!？」

そう、私が龍一と別れて、まだたったの二か月。だけど本当に結婚するって言うんだから、いやになる。その上、相手は……

「すぐその、真紀と……」

「はあ!? なんだそりゃ!」

見上げると、広輝はひどく驚いた様子で目を見開いている。でも、すぐに鋭い眼差しで私を見つめ――

「俺に、ちゃんと説明しろ」

そう言って、缶ビールのプルタブを開けた。

龍一と真紀、それから広輝と私。この四人はみな同い年で、小学校から高校まで同じ学校に通った同級生だ。

真紀の家はすぐ近所で、私と広輝の家からほんの二、三分の距離。私と真紀は女の子同士ということもあって、小学校に入學する前から仲良しだった。

真紀は、女三人姉妹の真ん中で、姉がいるせい、小さい頃からおませさんだった。背が低くていかにも女の子って感じ。兄しかない私に、女の子に人気のキャラクターやマンガ、アイドルのことなんかを教えてくれた。真紀の家で、彼女の姉妹とおままごとやお人形で遊ぶのも楽しかった。

姉のようにふるまう真紀と、妹体質の私は、相性が良かったと思う。別々の大学に進んでからは会う頻度は減ったけど、私は彼女のことを親友だと思っていたし、周りからもそう思われていたんじゃないかな。

一方龍一は、私が勤める信用金庫の同期でもある。入社試験会場で声をかけられた時

は、知っている顔がいてほっとしたのを覚えている。配属された支店は違って、入社式や研修、同期の飲み会などで顔を合わせているうちに、自然と二人で話すことが多くなっていった。高校時代まではただの同級生であまり話をしたことがなかったけど、思いつく共有しているせい、話がはずんだ。

そして、入社から半年ほどたった頃、

「俺、小川みたいなタイプと付き合ったことないけど、癒し系でけっこう好きかも」

龍一のそんな告白で、私たちは付き合い始めた。それはこの春まで続いていたのに……

広輝は喉を反らしてビールを飲んだ後、続きをうながすように黙って私を見つめている。忘れたいと思いつつも決して忘れられない出来事を、私はポツポツと話し始めた。「――えっとね、真紀はね、同じ会社の年下君と付き合ってたの。でもね、うまくいってなくて、それを相談したいって言われたんだ。『男心が知りたいから龍一も連れて来て』って言われて……だから、三人で飲む約束したの」

あの日、真紀からかかってきた電話を思い出す。その後起こる悲劇も知らず、私は本気で友達との恋愛相談にのるつもりだった。

「それ、いつの話だ？」

広輝の質問に、私は「二月」って答えた。

「でもね、その日に限って、……私、定時で帰れなかったの。残業の途中で真紀にメールしたら、『龍一に話聞いてもらってるから、遅くなるなら無理しなくていいよ』って。結局仕事が終わったのも遅かったし、疲れてたから帰ったんだけど……」

「その夜、二人は酔った勢いでやつちゃって、子どもがデキたの」

それを聞いた広輝は、ため息をつき、目をふせてポツリとつぶやいた。

「……デキ婚かよ……龍一と真紀が……」

そして、ふと何かを思いついたように、私を見た。

「——ちょっと待て。真紀の子は年下君の子っていう可能性もあるだろ？」

以前の私も、その可能性にすがりついた。でも、それは簡単にうち砕かれた。

「真紀、会社の人間関係で色々あって——結婚して会社辞めたいって、自分から年下君に迫ったんだって。彼は、考えるって言ったらしいけど、それから冷たくなって、今年に入ってからエッチもなくなっちゃって言った。飲みに行ったのが二月だから、やっぱり龍一の子だと思うよ」

「結婚を迫られて、男の方が冷めたのか……」

広輝はため息をついた後、私を気づかうように優しい声で言った。

「俺さ、さっき、下でおまえを見た時、やせたなって思ったんだけど、やっぱそのせいかな？」

「そりゃあねえ。さすがにショックで……。食欲がないなんて、生まれて初めての経験だったよ。でも、そのおかげでダイエットできたから、少しはいいこともあったかな」

「何言ってるんだよ。もともとダイエットなんか必要ないだろ？」

私が無理して軽く笑うと、広輝は一瞬語気を荒くしたけれど、すぐにまた気づかうような声に戻った。

「それで、おばさんとか……うちの母さんとか、このこと知ってるんだよな？ 何て言ってるんだ？」

私は広輝を見てうなずいた。

「お母さんも久美子さんも怒ってたけど……私と龍一は結婚してたわけじゃないからね。不倫じゃないし。まあ、恋愛でも浮気はだめなんだけど……子どもがデキちゃったら、負けだよ」

久美子さんが涙ぐみながら、「絶対にもっといい男が現れるから」って、なぐさめてくれたことを思い出す。

「相手は真紀だし、向こうのお母さんが困ってるのも知ってるし、とにかく赤ちゃんがいるんだもん。みんなだって、強くは言えないよね。もうこの話は禁忌タブーみたいな感じ」
仕方がないことだ。そう思ってる。私は小さく笑ってみせた。

「それで……おまえは大丈夫なのか？」

広輝はひどく心配そうな表情を浮かべて、私の顔を見ている。心配させないように、大丈夫だって思ってもらえるように、明るい声でしっかりと返事をした。

「うん。考えてもつらいだけだから、考えないようにしてる。付き合ってること会社には秘密にしてたから、そこは大丈夫だし。それに最近ね、私と龍一は、最初から合わなかったって気もしてるんだ。本当は、真紀みたいなコが龍一のタイプなんだよ」

言い訳するようにそこまで言った途端、情けなくなってきた。自分もつとキレイだったら、せめて、もつとおしゃれだったら、こんなことにならなかったかもしれない。私はいつ弱音を吐くように、言葉が続けてしまった。

「もともと、私は龍一のタイプじゃなかったんだよ。龍一は華やかでおしゃれなコが好きだったの。もつと化粧しろとか、もつとセンスのいい服着るとか、そんな感じのこと色々言われたもん。だけど私、どうしていいかわかんなくて……龍一の言うとおりにできなかつたの。——あ、でもね、今はもうだいぶ落ち着いてきたよ。——後は、披露宴さえのりきれば大丈夫。ほんとは行くのいやなんだけどね」

「はあ？ おまえ、披露宴に行くつもりなのか!？」

広輝が驚いてこちらに身を乗り出す。そうだよ、やつぱ、そう思うよね……

「うん。真紀だけじゃなくて、真紀のお母さんにも謝られて、お願いされちゃったの。仲良しの私が披露宴にいなかったら、みんなが色々思うから、出てほしいって。それと、

龍一は私と別れてから真紀と付き合い始めたって、みんなに言っしてほしいんだって」

「なんだと？ ……なんて自分勝手なヤツらなんだ!」

広輝の声に怒りがにじんできている。

「でもね、私、思ったの。もし、私が披露宴に行かなかつたら、きつとみんな、今回のことを好き勝手言うよね。けつこうひどい話だし。だから、少しでも噂話が減るように、もう平気って顔して行ってこようかなって思うんだけど……」

眉間にシワをよせて目を閉じる広輝は、何も言ってくれない。

「さすがに余興もスピーチも頼まれなかったし、ずっと黙って座っていればいいだけだから」

そこまで話して、私は口をつぐんだ。

誰かに聞いてみたかったけど、誰にも聞けなかったこと。それを思い切っって広輝に尋ねてみた。

「でもね、私がいいたら、みんな話しくいよね？ 私だったら……噂とか聞いてたら、そんなコに話しかけられないもん。ねえ、ヒコはどう思う?」

「——つとに無神経な奴らだな! 披露宴なんかしないで、籍だけ入れればいいだろうに!」

閉じていた目を開き、広輝は怒りをあらわにした。広輝が怒ると怖い。私は、つい真

紀をかばってしまった。

「真紀ね、結婚する時、友達をたくさん呼ぶのが夢だったの。私、何度も未来の結婚式の計画、聞かされたことあるもん。着物もドレスも着たいってね。希望どおりにするために、安定期に入ってから披露宴するんだって。私がするとも言えないでしょ？……それに、普通、結婚式って一生に一度のことだから、悔いのないようにしたほうがいいんじゃないかなって思うんだ」

「まったく、おまえってヤツは！——お人好しにもほどがあるなあ……」

あきれたように私を眺めた後、広輝は黙り込んだ。腕を組んで何やら考え込んでいる。しばしの沈黙の後——

「よし！ その披露宴、俺も行く。いいよな？」

思いもよらない言葉に耳を疑う。

「ええっ！ ヒロガ？ 真紀たちの披露宴に？」

「来月だろ？ 来月は海外に行く予定もないし、日本にいるなら予定なんかどうにでもなる。龍一の携帯の番号、教えろ」

突然の広輝の発言に戸惑いつつも、まだ忘れていない龍一の携帯電話の番号を告げる。まったくためらうことなく、電話をかける広輝。

「もしもし。龍一？ 俺、高橋広輝。わかるか？——え？ 本物に決まってるんだろ。ずっと同じ学校だったんだから、声ぐらいわかるだろ。——おまえ、結婚するんだってな。それでな、俺も披露宴に呼んでくれよ。——知ってるよ。来月の二十日だろ？ 香に聞いた。相手が真紀だったことには驚いたけどな。——ああ、そういうのはもういいよ。だいたいのは香から聞いたし」

すぐ隣に座る広輝の携帯電話から、微かにもれてくる龍一の声。彼の声を聞くのは、「話がある……」で始まった、あの別れの電話以来だ。

携帯電話を通して変なふうに響く龍一の声も聞いても、懐かしさも——愛おしさもない。ただ嫌悪を感じて耳をふさぎたくなる。

「——そっか！ 行ってもいいか。ありがとう。それでな、一つ頼みがあるんだけど、俺の席は香の隣にしてくれ。——そう、同じテーブルの隣同士だ。——そんなのどうにでもなるだろ？ 男友達の最後が俺で、女友達の先頭を香にするとかさあ。隅っこでもどこでもいいから。頼んだぞ。——いや、スピーチとかそういうのはやらないから。——おまえ、香の気持ちを考えたことがあるのか？ 披露宴の間、俺がずっと香の隣にいてやるんだよ。おまえ、ひどいことしたんだから、それぐらいのことしろよ。——ああ、招待状は実家に送ってくれ。——番地？ 香の家は知ってるんだろ。香んちが二百十番地が俺んちが二百十一番地だよ。——ああ、そういうことでよろしく」

電話を切った広輝は、力強い眼差しで私をまっすぐに見て言った。

「披露宴の間中、つうか、行くところから家に帰るまで、俺がずっと一緒にいてやる」
その言葉を聞いた途端、顔がゆがんで、涙があふれてくる。

「……ヒロ、ありがとつ。私、本当に披露宴に行くのいやだった……いやでいやでたま
んなかったけど我慢しようって……。でもヒロと一緒になら、みんなに何言われても、誰
とも話さなくても、ヒロがいてくれるなら……大丈夫。あ、ほっとしたあ」

ずっと胸の奥に溜まっていた本当の気持ちを言葉にしているうちに、涙がぼろぼろと
こぼれたけれど、最後は広輝に笑いかけることができた。この涙は、このところ続い
た苦しい涙じゃなくて、思いがけない広輝の優しさに対する嬉しさと安堵と——そんな
気持ちが入り交じった涙。

止まらない涙を手の甲でぬぐいながら、私は何度も広輝にお礼を言った。隣に座った
広輝が、そんな私をふわっと抱きしめた。そして、大丈夫とも言うように、大きな手
が私の頭を優しくなでる。突然の出来事に驚いてドキッとしたが、その胸に頭を預けて
いると、気持ちが安らかになって涙も少しずつ止まっていった。

こうしていると思いつく。幼い頃、私が泣いていると、広輝はいつも「ヨシヨシ」っ
て言いながら、私の頭をなでてくれた——

しばらくすると広輝が、腕の中にいる私のメガネはずし、ティッシュで涙をふいて
くれた。そして、鼻をすすっている私に向かって「ほら、鼻かめ」とティッシュを差し
出す。

私は広輝の腕の中から抜け出して、素直に鼻をかんだ。

「ほんと〜にありがとつ。気が楽になった。それに今年の誕生日は史上最悪だったけど、
ヒロのネックレスで、一気に挽回しちゃった」

鼻もさっぱりしたけど、気持ちもさっぱりとして、私は笑った。そして自分の誕生日
の話をしたところで、思い出した……

「——ねえ、そういえばヒロの誕生日、もうすぐだよね。私に何かプレゼントさせて！」
「そんなのいいよ。あのネックレスは、たまたま目についただけだから」

……そう言うと思った。でも、今回のお礼に、今まで助けてくれた分もいれて、絶対
に広輝にお返しをしたい！

「そんなこと言わないで。ねえ、今、何か欲しいものない？ あっ——でも、信用金庫
職員の私でも大丈夫なプレゼントにしてね」

ちよっと情けないけど、そこはしょうがないよね。でも、絶対にお返しをしたい。私
は隣に座る広輝の片腕を両手でつかんで訴えた。

「こんなに気持ちが楽になったの、久しぶりなんだもん。ヒロと一緒に行ってくれるっ

ただで、あーんなにいやだった披露宴ひろうたいが、ちよつと楽しみになってきた。ねえねえ、何かないの？ 私に用意できるものなら何でもいいから。ねえ！」

広輝を見上げて私が迫ると、広輝は目をそらしながら言った。

「香にしちゃあ、珍しくしつこいな。おまえ、酔ってるだろ？」

そりゃあ、缶ビール一本分は酔ってますよ。でも、広輝に感謝の気持ちのプレゼントを贈りたいという思いは心からのものだ。それを拒絶されたくはない……と思った時、目をそらしたままの広輝が、ためらいがちにボソリとつぶやいた。

「じゃあさ……おまえ」

「ん？ おまえって……？」

ピンとこなくて首をかしげる。

「おまえさあ——今ノーブラだよな。さつきから、ちらちら見えて……俺、正直たまらないんだけど」

「……ええっ！——というか、私なんか……そんな気持ちになるの？」

広輝の言葉の意味がやつとわかり、驚いた私は、今の自分の格好を見下ろした。

——タンクトップにショートパンツ、髪は大きなバレッタでアップにしてある。久美子さんだし、いつもの調子でお風呂あがりのまま気楽に訪ねた。広輝を見た時、自分の格好がチラッと頭をよぎったのは確かだけど、広輝は兄の徹と同じ目で見てる——つ

まり、私のことなんか女として見ていないよねってすぐに思った。

「俺、二十六歳の健康な男だぞ、目の前におっぱいがあれば、普通に触りたくなるんですけど」

そっぽを向いて、広輝がつぶやく。

「……え〜と、その……ヒロ……からかって？」

そうとしか思えない。

「だってよく、おまえ、いい匂いするし。さつきだって、つい昔の癖で、おまえのことヨシヨシしちゃったけどよく、他んとこヨシヨシしたくなっちゃうし……」

すねたように、唇をとがらせている。なんだか可愛い。

「ぶっ……ッ」

つい噴きだしちゃった。

「笑うなよ……」

そう言つて、広輝は優しく私を見つめた。でもその瞳に浮かぶのは優しさだけじゃない。甘さと確かな熱が見え、私は戸惑う。そんな私の腰を広輝は抱きよせた。バレッタを外し、少し湿り気の残る髪を指ですく。耳元に顔をうずめてスーッと息を吸い込んだ後、ささやいた。

「きれいな髪だな……」

広輝の女つたらしが、初めて私に発動した瞬間だった。

「ちよつ、ちよつ、ちよつと、ちよつと……待つて……」

あつという間にタンクトップの裾から滑り込んでくる大きな手を、私は慌てて押しとどめた。

「——なんだよ……ダメなのか？」

広輝は、私の耳元から顔を上げ、困ったような顔をした。そして私の気持ちを測るはかように、だけど熱のこもったままの目で、私をじっと見つめる。流されそうになる自分を抑え、私は広輝に言った。

「ヒロ……浮気はダメだよ」

「浮気？ 香？ おまえ、今フリーだよな？」

あたりまえじゃない！ さつき、龍一に振られた話、したばかりだよな？

「私じゃない！ ヒロが浮気しちゃダメだって言ってるの！」

「俺？」

広輝は、意外そうな顔でボカンとしている。

「そう。だって私、浮気されて、こんな目に遭ったんだもん」

「浮気って……俺、付き合ってる女いないけど」

コイツ。何言ってるの！ 信金のロビーに置いてある週刊誌で読んだんだからね！

「モデルのジュリちゃんは？ この前のフランス、一緒だったんでしょ？ 私、週刊誌で読んだもん」

「ああ……あの女」

広輝は、いやそうに顔をゆがめた。

「あんなの勝手に追っかけてきただけだよ」

「同じホテルに泊まつてるって書いてあったけど？」

「ホテル、調べられちゃったんだ。同じホテルだけど、同じ部屋じゃない」

広輝は吐き捨てるように言った。

「ジュリちゃんと、付き合っていないの？」

「ねえよ。ホテルの部屋に来たけど、絶対に入れなかったから。ああいうのに手を出すと、後が恐ろしいからな。わかるだろ？」

そう言われても、あんな華やかな美人を恐ろしいだなんて……わかるような、わからないような。

……返事ができない。でも、ジュリちゃんとは付き合ってたんだ。

「正直言って、寄ってくる女はいっぱいいるけど、わけわかんねえ女に簡単に手は出さねえよ。俺、なんだかんだで一年以上してねえし。それなのにおまえ、こゝんな薄着で、無防備に露出しやがって。我慢できっこないだろ！ 責任取れ」

確かに私は、わけわかんねえ女じゃなくて、よく知ってる女だろうけど……

「じゃあ……私は、ヒロの欲求不満のはけ口？」

「バカ！ おまえ、なんてこと言うんだよ！」

その後、広輝はしばらく黙って私の顔を見つめていたが、やがて思い切ったようにきっぱりと言った。

「よし！ 香。——俺と付き合ってくれ」

「つ、付き合うつて……？」

「俺のカノジョになつてくれ」

「うそ!! ムリ、ムリ、私がヒロのカノジョだなんて……ムリ！」

あまりに思いがけない広輝の言葉に、私は顔の前でブンブンと手を振った。

「うっわ〜！ 俺、今、生まれて初めて女に振られた」

大げさに肩を落とした広輝の口がへの字にゆがむ。

「振るなんて……。私なんか、ヒロのカノジョがつとまるわけないでしょ」

「別に、カノジョになつたつて、今までとそんなに変わらないだろう？」

高橋広輝のカノジョだなんて重たい言葉を、よく簡単に口にできるなあ。それにしても気になる。聞いたら怒るかもしれないけど……私はためらいながら口を開いた。

「あの……私じゃなくても、ただやりたい相手が欲しいだけ……とかじゃない？」

「失礼なヤツだなあ。俺だつて、おまえに女を感じて、正直参ってるんだよ。でも、昔っからおまえのことほっとけないんだよ、俺は。龍一の話聞いて、だったらもう俺のもんにしたいつて思つて……そしたら手を出したくなくて……なんか我慢できないつつか……悪いか!？」

あの広輝が、赤くなつてそんなことを言うから、私の顔も熱くなる。そして……あの広輝が、自信なさそうに聞いてくる。

「おまえ、俺に抱かれるのいやか？ 無理やりつてのは、俺の主義じゃない」

「ヒロに抱かれるのがいやだなんて……。私にとつて、ヒロに抱かれるのは、イケメン俳優に抱かれるようなもんで……。抱かれるつていうより、抱いていただくつて感じだよ」それを聞いた広輝は、嬉しそうにニヤツと笑つた。

「ほ〜う。じゃ、素直に抱いていただけ」

広輝は着ていたTシャツを脱ぎすてて、そのたくましい胸筋をあらわにした。

——ふと気づけば、胸筋に見とれてポ〜ツとしていた私のタンクトップが……ない！ 大慌てで、胸の前で腕を組んだ。

「電気消して……」

「キレイだからいいじゃん。見せろよ」

「キレイなわけないよ。ヒロのまわりにいる女の人たちみたいにキレイじゃないもん」

「俺のまわりの女って……誰と比べてんだよ？」

広輝は不機嫌そうに顔をゆがめた。

「今まで噂になってた女の人、みんな美人だし……。モデルとか、芸能人とか、まわりについてばいいるでしょ？　ほんとに……。こんな私でいいの？」

「『こんな私』が自然でいいんだよ。サイボーグみたいなのはいやなんだ。おっぱいもシリコンでデカイだけだったり、下の毛だって……。まあ、あれだ。とにかくあまりにも不自然なのはいやなんだよ、俺は。自然体が一番だ！」

広輝の言葉は意外だった。でも、それがたとえ慰めだったとしてもほっとする。自然体なら自信がある。けど――

「……でも、恥ずかしいから暗くして……」

「お前は俺の誕生日プレゼントだろ。せっかくのプレゼント、よく見せてもらわなきゃな。とにかく合意がとれたってことで、もう遠慮はしねーぞ」

広輝は嬉しそうにそう言っ、私の頬を両手で包んで顔をかたむけた。

――私、広輝と……。キスしてる。

心臓が、ドキドキと痛いぐらいに高鳴り、喉元から迫り上がってくるような気がする。ガチガチに固まったままの私の唇を離れた広輝が、耳元で優しくささやいた。

「俺、本気だからな」

頬から離れた広輝の片手が、私の背中をポンポンとたたいた。体から力が抜けていく。私は、胸の前で組んでいた腕を広輝の背中にゆっくりと回して、全身をゆだねた。

顔を上げると、広輝が静かに微笑んでいる。私のおでこに、目尻に、そして耳たぶに唇を落としていく。再び、ちゅっ、と小さな音をたてて唇にキスした後、優しい眼差しで私を見つめる。そんな広輝に見とれている私の頭を大きな手が支え、広輝の唇が、私の唇を包み込んだ。まるで、私の唇を食べちゃうようなキス。舐められ、吸われ、下唇を優しく噛まれ……。濡れた音を立てて続く甘いキスに、全身の血が沸騰しそう……

唇ってこんなに感じるんだ……。広輝の舌が入り込み、柔らかく私の舌にからまる。されるがままにからめた舌は、広輝の口内に吸い込まれた。激しいキスに鼻から息が抜ける。

「んっ！　……。ううんっ……」

広輝も「んっ……」と微かに声をもらした。

たくましい腕に閉じ込められて、朦朧もうろうとしながら思う。

――広輝ってキスが上手なんだ。

――上手なキスって、こんなに気持ちが良いくて、興奮するんだ。

ふっと広輝の唇が離れた。寂しくて、私は閉じていた目を薄く開ける。

その瞬間、軽々と抱きかかえられ、優しくベッドに下ろされた。そして、下半身に残

るショートパンツと下着が、あつという間に脱がされた。

明るい部屋が恥ずかしくて、壁に向かつて横向きになり、広輝に背を向ける。

背後に聞こえる衣擦れの音。広輝が残った服を脱ぎすてる気配。やがて私に寄り添い——

「香、やっぱおまえ、色が白いな……キレイだ……」

そうささやいて私の肩に手を置き、広輝は私の背中に、ちゅつと大きな音をたててキスをした。——ビクッと体が震える。

「ふん……」

広輝の小さな声が聞こえた瞬間、背中にスーとした刺激を感じた。私の背骨に沿って柔らかいものが這っていく。

「きゃ……っ！」

全身が総毛立って背が弓なりに反り、同時に私の口から悲鳴のような声もれる。今の、広輝の……舌？ 後ろから包み込むように、熱を帯びた体を抱きしめられた。

「背中、感じるんだな」

嬉しそうに言った広輝の指が、今度は私のわき腹をスーッと羽のようにかすめた。

何？ ——肌が粟立つ。体がビクビクと小さく痙攣している。こんな……こんなところが感じるなんて、自分の体なのに、知らなかった。

「……あん……うう、ああ……ふう……うんっ……」

私を抱きしめたまま、そつと滑る広輝の指。私の体は小さく震え続け、喉の奥から震え声もれ続ける。私は自分の体の奥に、じわりとなめらかな液体が生まれるのを感じた。

広輝が私を仰向けにし、私の髪を指ですきながら見下ろしてくる。りりしい目元だけど、その眼差しは優しい。まだ息が整わなくて、私の胸は激しく上下している。恥ずかしくて、また胸の前で腕を組んだ。

「隠すなよ……」

広輝はそう言って片手で私の手を握り、指をからめてくる。

「だって……やせちゃったから……」

そんな私の言葉にかまわず、広輝のもう片方の手が、私の乳房をそつと包む。

「じゅうぶんだ。ああ、柔らかいな……たまんねえ……」

また情熱的なキスが始まった。

——広輝の唇が、私の唇から離れる。次にその唇はどこに触れるのか……

私の耳たぶに触れたかと思うと、まるで唇にキスするかのようになり、柔らかく包み、軽く歯をたてる。耳の奥にくちゅくちゅという音が響く。私は喉を反らして声を上げる。体の奥がズクリとうずいた。

——からめあった指がほどかれる。次にその指はどこに行くのか……

私の乳房を包み込み、乳首をつまみ上げる。唇がもう片方の乳首をくわえ、吸い上げる。キュッと嘸まれる私の乳首。痛みは瞬時に快感に変わり、体が跳ねる。その瞬間、体の奥からトロリとしたものがあふれるのを感じた。

広輝の熱い手が、私の体をなで回す。首筋、背中、お尻、太もも……。どこを触られても、気持ちがいい。でも……。でも……。一番触って欲しいところにその手がこない。触ってほしい……。もしかして、私は太ももをすり合わせる。私って、こんなにはしたなかったんだ……

やがて、広輝の大きな手が、私の茂みにやっつと届いた。ゆるく脚を開く私。そして——
「んん！……はああ……っ」

広輝の長い指でヒダの真ん中がこすり上げられ、その瞬間、唇からため息がこぼれた。「すっげえ濡れてる……」

私に顔を近づけた広輝の声は、なんだか楽しそうだ。

「……だって——っ」

散々じらされたんだもん。当たり前でしょ。なのにそんなこと言うなんて——
抗議したいけど、息が上がって続かない。ハアハアと、私の息だけが部屋に響いている。恥ずかしさにいたたまれなくなつて顔をそむけると、耳元で広輝の真面目な声が聞こえた。

「濡れてくれて嬉しいんだよ」

そして、ふたたび動き出した指が、ヒダの内側を上下になぞる。その動きはスムーズで、自分でもそこがすっかり潤んでいるのがわかる。ヒダの上部の小さな突起のまわりを、ゆるやかになぞる指。その指先が、敏感な突起の上を柔らかく滑る。もしかして腰が揺れた。

もう、広輝が欲しくてたまらない。私の中を——埋めて欲しい。それなのに……。その指さえも、ゆるやかに滑るだけで、私の中には入ってこない——

広輝の腕にすがって、ハアハアとあえぎ続ける私。もう、我慢できない。もしかしさが羞恥心に勝つてしまい、私の口からは欲望の言葉がもれた。

「もう……。だめ。ヒロ……。ちょうだい……。お願い……」

閉じていた目を開け、広輝を見つめた。広輝の下半身が固く立ち上がっているのは、ずっと素肌感じていた。手を伸ばし、そこに触れると、熱くて、大きくて——それが欲しくて、はしたなくねだる私の目に涙がにじんでくる。

そんな私の様子に驚いた顔をした広輝は指の動きを止め、上半身を起こした。

「ちよっと待ってろ……」

広輝は、少しかすれた声でそう言ってベッドから降り、バッグを引きよせて準備を始めた。私は、その間に乱れた呼吸を整えた。

しばらくして、広輝が私の隣に戻ってくる。ねだった自分が恥ずかしくて、その胸に頭をすり寄せ、抱きつく。

「可愛いな、香」

そう耳元でささやくと、私の膝を開き、上を向ききった自分のものをつかみ、私の中にゆっくりと埋めていく。欲しくてたまらなかった場所に根元まで押しこまれ、私の突起が押しつぶされた瞬間、体が震え、頭が真っ白になった。

「ひやつ、ああ……！」

喉から嬌声キョウセイがもれて——声を殺すことができない。

「くっ……！ いったか——？」

広輝が苦しそうに言った。私は、広輝の腕をギュッとつかんだままうなずく。

広輝は、ふうつと息を吐き、私の髪を優しくなでながら、ゆっくりとキスをする。

「おまえん中、気持ちいい……」

とろけるような声で、私の唇の横でつぶやいた後、広輝は私の下唇をくわえた。私の中がうずき、広輝をキュツとしめつける。

「おまつ……待って。俺だっけっこう限界なんだよ」

広輝は私に噛みつくようなキスをして、大きく腰を動かし始めた……

「龍一のことなんか……あんなヤツのことなんか忘れろ。俺のことだけ考えて、感じる……」

もう、龍一のことなんかすっかり頭の中から消えていた。皮肉なことに、その言葉を聞いた途端、龍一のことを思い出した。そして、自分がしがみついている体の大きさの違いに気が付いた。龍一に比べてはるかに大きな広輝の背中。その広輝に組み敷かれ、まるで征服されているような……ううん、守られているような気持ちになる。

ああ、大きな背中が頼もしい。たくましい広輝は私の守護神のよう……。広輝の言葉どおり、もう広輝のことしか考えない。ううん、考えられない。もう龍一のこととは忘れられる。私はそう思った。

「ヒロッ、ああっ……すごい、んん……ヒロ——ッ」

すべてが解き放たれて、感じるままに声を上げた——

「ああっ、もうだめ、いく……んんっ！」

背を反らし声を上げた後、私の体から力が抜けていった。

広輝は上半身を起こし、私の膝に手を置いて脚を大きく開き、激しく腰を打ち付けた。そしてすぐに、「うっ！」とうめいた後、私の上に倒れ込んだ。私の中にいる、まだ大きいままの広輝が、放出に合わせてビクッビクッと動くのを感じる。

「ああ……いっちゃまった……。久しぶりだったし、おまえん中気持ち良さ……」

ハアハアと荒い息を吐きながらそう言った広輝の声は、少しかすれていた。

「——私も……すごく良かった。なんか……恥ずかしい」

私も荒い息とともに、そう答えた。それを聞いた広輝は満足そうにニヤリと笑い、私の頭を抱え込み、優しいキスをくれた。

——後始末をした後も、広輝はベッドの上で私を抱きしめ髪をなでながら何やら考えていた。しばらくして口を開く。

「香、明日予定あるか？」

「ううん」

明日も、明後日も、予定は何もない。私、寂しいかな……

「じゃ、俺と出かけるぞ」

意外な言葉に驚いて顔を上げる。

「どこへ？」

「ん？ ……秘密だ」

「秘密？ 何それ？」

私の質問には答えずに、広輝は難しい顔をして何か考えているようだった。その横顔を見ているうちに、しつこく聞き出すことはやめようという気になった。

「——ああ、もうこんな時間だな。おまえ、そろそろ家に戻ったほうがいいだろ。俺、ちょっと電話しなきゃならないところがあるんだ。明日の時間は後でメールする」
私を抱きしめていた腕を、広輝はあっさりとはどいた。

家に戻るために高橋家のキッチンから外に出ようとした時、背後から広輝の声が聞こえた。

「香、大丈夫だから。俺が、おまえのこと守ってやるから」

振り向いて広輝を見つめ、うなずいた。その言葉が嬉しくて、鼻の奥がツンとなった。

広輝のおかげで、気持ちも楽になって、運動(?)して体もほぐれたせいか、昨夜は久しぶりにぐっすりと眠ることができた。まだ朝六時だというのに、頭はスッキリとしている。

あの広輝に抱いていただけなんて、朝起きたらやつぱり夢だった——なんてこともなく、携帯電話を開くと、広輝から届いたメールがちゃんとそこに残っている。

『朝七時に俺の車に集合。コンタクトレンズ持ってこい。おしゃれも化粧もしなくていい』
そっけない文面。

昨夜、家に戻ってしばらくしてから届いたそのメールを目にした時は、ちょっと驚いた。

朝七時？ しかもコンタクトレンズって——スポーツでもするの？

なんにせよ『おしゃれも化粧もしなくていい』という一文があったので気が楽だ。もし、この一文がなかったら……

鏡の前で悩み続ける自分の姿が目には浮かぶ。ましてや『おしゃれしてこい。化粧もちゃんとするんだぞ』なんて書いてあったとしたら……クロゼットを引っかき回して、寝不足まちがいなし。ううん、きつと寝られなかったかも。

今日の私は、広輝に言われたとおり、すっぴんにメガネ。使い捨てのコンタクトレンズは、とりあえず予備も持って行くことにする。コットンのチュニックにレギンス、スニーカーという服装は動きやすい。低い山くらいなら登れるかも——登るのやだけど。このスタイル、近所のスーパーなら全く浮かずに溶け込める。

七時ちょうどに家を出た。

高橋家は、敷地の南と西が道路で、北と東は民家と接している。その東側の民家ってのが私の家。数年前、プライバシーを守るために、南西の道路沿いに車庫と高いフェンスができて、通りからは一階部分は見えない。わが家の南側の道路から高橋家を覗き込んでも、木々の間からキッチン doaが見えるだけ。フェンスが完成した時、久美子さんは「これなら暑い日に、パンツ一丁でリビングで寝ても大丈夫」って笑ってた。

私は、例の生垣いけがきの切れ目から高橋家の庭に入り、キッチンの横を通り過ぎて、車庫へ回った。

広輝がすぐに現れてリモコンで正面のシャッターを開け、二人でピカピカの真っ白いドイツ車に乗り込んだ。

まるで、夕べのことなんかなかったかのように、広輝の態度はいつもと同じ。ってことは、普通に優しいってことなんだけど。もしかしたら、その振る舞いが甘くなって、ベタバタの広輝になっていたら……なんて、ちょっと期待していた。でも、正直なところほっとしている。だって二十年以上の付き合いだもん、いつもと同じ態度でいてくれないと、私も反応に困っちゃう。

通りになると、朝の町はキラキラとまぶしかった。今日もいい天気ですぐ暑くなりそうだし、私もおそろいな表情でハンドルを握っている広輝ひろ輝に尋ねる。

「久美子さんは？」

「まだ寝てるよ。夕べはかなり遅かったようだからな。おまえ、何て言っただけで出てきた？」

「うちは、お母さんしか起きてなくてね、『どこ行くの？』って聞かれたから、『わかんないけどヒロと一緒に』って言ったら、『あら、いいわねえ』だって。ヒロのこと信頼してるんだよね」

「そうか。じゃあ、その信頼に応えなきゃな」

「信頼に応える？　ねえ、どこに向かっているの？　もう教えてくれてもいいよね？」

「東京だ」

涼しい顔で答える広輝。

「東京!?　……ってことは、やっぱりヒロのクラブでスポーツとかするの？」

ぎよっとして思わず隣の広輝の横顔を見上げる。

「俺、休みだぜ。勘弁しろよ」

広輝は口をへの字にして、助手席に座る私の顔をチラッと見た。

東京——って言うから、てつきりヒロスポーツクラブに行くのかと思つて焦っちゃった。だって、こんな気の抜けた服装で、広輝の知り合いに会うなんて、いくらなんでも恥ずかしすぎる。とりあえずはほっとしたけど、だったら肝心の行先は？

「じゃあ東京のどこ？　私、スポーツするんだと思つてこんな格好で来ちゃった」

「なんでスポーツなんだ？」

不思議そうに広輝が言う。

「だって、おしゃれしないでいいし、コンタクトレンズ持つてこいだし……」

昨夜、寝る前の私の推理は——明日は、私の気分転換のために緑の多いところに行つて、散歩でもするのか？　根っからのスポーツマンの広輝のことだから、軽い運動でもするつもりかな？　コンタクトレンズを持つてこいってことだし、二人でバレーボー

ルとか？　それともバドミントン？　私はヘタクソだけど、広輝と一緒に楽しいよね。ふふ……なんだかラブラブのカップルって感じ？　——だったけど、それはどうやらた

だ的の外れな妄想だったみたい。朝、カーテンを開けた時、晴れ渡る空に嬉しくなつて、

バッグの中に帽子まで入れてきたのに……じゃあ、いったいどこに行くの？

高速道路のインターチェンジが見えてきた。入り口のバーが上がり、東京方面の高速

に乗ると、しばらく黙っていた広輝が口を開いた。

「よし！　高速に乗ったし、覚悟を決めろ。今日は、俺の行きつけのサロンに行く」

「サロン？」

まったく予想外の答えだった。

「……それって、エステとかそういうの？」

「エステも、ヘアメイクもひつくるめてだ。おまえ、今日はサロンで、まな板の上の鯉

になれ」

広輝が言うには——今、私たちが向かっているのは、広輝が住んでいるマンションの近くのサロン兼セレクトショップ。オーナーの人柄と腕は信頼できる。テレビ出演の時などに、広輝はそこをスタイリスト代わりに利用している。セレクトショップは、カジュアルからフォーマルまで洋服はもろろんのこと、靴やアクセサリー、バッグも下着

も扱っている。今日はそこで上から下まで全部そろえるから、どんな格好でもOK——だった。

「そんなところに……私なんか……」

「そう言うと思った。だから秘密で言ったんだ」

広輝はあきれたような口調で言った後、すぐに怒った顔で続けた。

「おまえ、悔しくないのか？ おまえは新郎の元カノだぞ。普通は何か騒ぎを起こされたらって、元カノなんか招待しないぜ」

「私、何もしないもん……」

「あの二人もそう思ってるんだよ。おまえならご祝儀持^{しゅぎ}ってやって来て、大人しく座って祝ってくれるって。——俺は悔しいんだよ！ 復讐^{ふくしゅう}したいだろ。無理やりマイク奪^{くわ}って『新婚に新郎を寝とられました！』とか言^いってやりたいけど、そんなことすりゃあ、おまえが傷つくだけだ」

復讐——そんな物騒なことを、考えもしなかった。

「そりゃあ私だって悔しいよ。みじめだし。でも、復讐だなんて……そんなことしたくない」

したくないって言うより、できないんだ。こんな私に、いったい何ができるって

うの？

「だから、香は行って座ってるだけでいいんだよ。あんな半端なナンパ顔の龍一なんて、魅力は職業が安定してるってだけだろ？」

「半端なナンパ顔って……ははっ、当たってる分ひどい」

でも広輝に比べたら、ほとんどの男がナンパ顔になっちゃうよ……そう思いながら、少し目尻の下がった龍一の顔を思い浮かべる。高校時代、バスケット部だった龍一は確かにチャラチャラしてたけど、特に目立ってたグループの男子じゃなかったし、半端っけ言われればそのとおりかも。今は今で、信用金庫で働くからにはナンパな外見でいるわけにもいかず、だからって真面目^{まじめ}一本やりにもなれず、確かに半端感が漂う。だけど、そんな彼でも私にはもったいないって思ってたんだけどな。

「香がうんとキレイになって、堂々と座ってるだけで十分復讐になるんだよ。『そんな男もういりません！』って顔して、澄ましてりゃいいんだ」

広輝の復讐って、そういうことなの？

確かにそうかもしれない。私が落ち込んだ顔で披露宴^{ひろうえん}に行^いってみすばらしく座っていたら、ますます噂^{うわさ}的にされちゃうよね。私に『そんな男もういりません』なんて顔ができると思わないけど、堂々と座っているぐらいなら……:…:というか、堂々としてなきゃ、みじめすぎるよね。

「真紀だって、強引っていうか……傲慢か？ おまえなんか子扱いされてんだろ、正直」
 広輝、痛いことをズバツと言ってくれるなあ。いつも私には優しいけど、今のはキツイ！

「うわー、子分かあ……せめて妹分って言ってよ。——でも、確かにそうか。今回のこと考えると、私、やっぱりバカにされてるよね？」

そのあたりのことってそれなりに自覚してたことだけど、人から改めて言われたり、自分で口に出したりすると、なんだか悔しくなって落ち込んでくる。

「おまえ、ろくに化粧もしないだろ？ 今までキレイになろうって、本気で努力したことあるか？」

「本気で？ ……それは、ないかも。だって、わかんなかったし。色々やっても、なんだかやらない方がマシな感じになっちゃうんだもん」

中学入学から高校卒業までの六年間、家庭科部だった私は、料理と裁縫の腕はちよつと上がったけど、おしゃれの腕はちよつとも磨かなかつた。だって、家庭科部には、おしゃれを競い合うような子なんていなかったから。

そんな私でも、大学生になった時は、雑誌を読んだり友達に教えてもらったり、がんばってみたんだよねえ……おしゃれってものを。使い捨てのコンタクトレンズを使つた

り、パーマをかけてみたり。コンタクトレンズは取り扱いが簡単で、つけ心地も快適だった。でも、パーマは上手くまとめることができなくて、結局ストレートに戻っちゃった。そんなある日、「香は色白で肌がキレイだから、化粧しなくてもいいんじゃない」って、友達に言われたんだ。

確かに私は肌だけはキレイってほめられる。でもこの時は、「化粧が下手だ」ってそれとなく教えてくれたのかなと思つた。なぜって、自分でも化粧なんかしないほうがマシだと思つていたから。それから時間は時間とお金の無駄遣いはやめちゃつた。

「それなら大丈夫だ。マシな方がわかるってことは、センスはちゃんとあるんだよ。たぶん方法がわかかってないか、間違ってるんだらうな。あつ、でも、おまえが不細工だつて言ってるわけじゃないからな。勘違いすんなよ」

私を気づかなくて、そんなフォローを入れる広輝。

「とにかく復讐^{なぐさ}するのは抜きにしても、もつとキレイになつたほうがいいだろ？ いいチャンスだと思うぞ」

「そうか……そうだね。私だって、キレイになりたい。おしゃれだつて楽しみたい」
 素直な気持ち^{まごころ}が口をついて出た。

キレイになる——そうすれば、披露^{ひろうえん}宴^{えん}で「かわいいそう」って思われなくて済むかな？

一緒に行ってくれる広輝が恥ずかしい思いをしなくて済むかな？

「プロにアドバイスを受けたり、セレクトしてもらうのが手取り早いと思うんだ。俺はな、今まで自分で目的とか目標を決めたら、それを目指して最大限の努力をした。俺おまえもキレイになりたいって思うんなら、今日のこのチャンスを利用しろ」

「チャンスか……そうだね。ヒロは、他の誰よりも練習してたよね。私、ヒロがすごく努力してきたこと、隣で見てたから知ってるよ」

そう言うってハンドルを握っている広輝を見ると、ちよつと照れくさそうな顔をしている。

「私のためにサロンのこと考えてくれたんだ。……ありがと、ヒロ。よし、決めた！今日は鯉こいになってまな板の上で寝る！」

とは言ったものの、急に不安になった。

「でも……高いんじゃないの？そこ」

「そんなこと気にしないでいいんだよ、おまえは。俺がやりたくて勝手にやってることなんだから。夕べ急に電話したんだけど、オーナーが予約を融通ゆづうしてくれてよかったよ。来月の披露宴ひらけえんのこととも言ってるからな。その日もオーナーに任せれば、きっと大丈夫だ」

「でも……」

ためらう私に、有無うむを言わせない口調できっぱりと広輝は言った。

「じゃあさ、誕生日プレゼントのおまけだと思ってくれ。どうせやるなら、できる限りのことをしたいんだよ。とにかく遠慮は無用だ。金の話ももうなしだ」

その後は、広輝のおしゃれの苦勞話に話はずんだ。

広輝は現役時代、サッカー界のオシャレさん代表みたいに言われてたけど、実は苦勞してただって。なんてったって、みんなが一番おしゃれに関心を持って試行錯誤する十代から二十代前半、ジャージしか着なかつたんだから。海外から戻った時に、成田空港で撮られる写真が恐怖だった——なんて聞くと、広輝にも苦手なものがあつたんだって安心しちゃう。

そんな話をしている間に車は東京に入った。首都高が少し渋滞じゅうたいしたけど、予約時間の九時より十五分ほど早く、そのサロン兼セレクトショップに到着した。

その建物は、想像していたよりも大きく、すっきりとした外観をしていた。

『コ』の字型の建物の一階が女性用と男性用のセレクトショップに分かれていて、それぞれの二階部分がサロン。建物が挟まれた真ん中のスペースが駐車場になっている。なるほど、これなら車の乗り降りは表通りから見えにくい。色々色々と配慮配慮されているように感じる。

駐車場に車を停めると、建物の中から二人の女性が現れた。